

理学療法学科学生が講師となったサービス・ラーニングが 受講者に与えた影響の探索

松村剛志¹⁾，山田雅敏²⁾，小貫睦巳¹⁾

1) 常葉大学保健医療学部理学療法学科

2) 常葉大学健康プロデュース学部健康柔道整復学科

要 旨

浜松市と大学との連携事業として行った「Walking を Thinking」講座の概要を報告するとともに、理学療法学科学生が講師となったサービス・ラーニングが受講者に与えた影響を探索的に調査した。対象者は、平成 28～30 年度のウォーキング講座に参加した 35 名中、質問紙の記入を行った 33 名であった。講義の難易度や講座の有用性などについて、質問紙の自由記述欄へ印象に残ったことの記載を求めた。記入内容をテキストデータとして、Steps for Coding and Theorization を用いた分析を行い、受講者に与えた影響のストーリーラインを再構築した。こうして得られたストーリーラインでは、受講者が個別アドバイスや学生との交流から満足感を得ており、歩行に関する知識を深めて、アドバイスの内容を実践してみようとする気を活性化させていることが明らかとなった。さらに、本講座は、受講者にとって自分自身の身体を客観的に見つめ直す機会となり、もっと知りたいという知的好奇心を刺激していた。平成 28、29 年度の受講者は講座運営の不慣れさや内容の難しさに不満を抱いていた。しかし、平成 30 年度の受講者においては不慣れさを容認し、指導的見地から改善へ向けたアドバイスを提示していた。受講者はサービス・ラーニングを通じてエンパワメントされ、学生との双方向性の関係から、指導する立場についての自覚が芽生えている可能性が示された。

キーワード：サービス・ラーニング，受講者，探索的研究

はじめに

平成 21 年 3 月に取りまとめられた浜松市生涯学習大綱¹⁾は、「市民の学びや経験に基づく自発的な活動を、地域全体の発展に結びつける仕組み作り」を自治体の役割の一つに挙げている。本提言を踏まえて浜松市では、平成 23 年度から生涯学習施設で行われている地域住民対象の講座開催の機会を、大学生に提供する「浜松市と大学との連携事業～大

学生による講座」(以下、大学生による講座)を開始した。大学生による講座は、平成 23 年度の 1 大学 4 講座から始まり、平成 30 年度には参加 5 大学が 52 講座を開催するまでに拡大した²⁾。本学浜松キャンパスの学生が担当した講座も、参加初年度となる平成 28 年度の 6 講座から、平成 30 年度には 15 講座の開催へと増加している。

このような地域社会における貢献的活動を

高等教育における教科学習と統合した教育手法は、サービス・ラーニング(Service-Learning)と呼ばれている³⁾。大学生が担う地域貢献活動は、その学びの専門性に依拠して様々で、医療系の学部・学科においては地域医療や公衆衛生に関わる支援実践が報告されている^{5,6)}。その成果については、活動を担う学生の側面にて知識・技術の深化、人と関わる技術の向上等が挙げられ、支援を受ける側においてはニーズに沿った実益と満足感を得られることが報告されている⁵⁾。本研究の筆頭研究者は平成28年度の大学生による講座から、卒業研究の一環として「WalkingをThinking」講座(以下、ウォーキング講座)の開催指導を継続しており、保健医療学部理学療法学科の学生が学内教育にて修得した正常歩行に関する知識と各種検査技術の社会還元を努めてきた。その過程において、受講者が知識の授受や検査結果を解説されるだけではない、学生講師との相互作用を生み出している様子を垣間見てきた。そこで今回、3年間にわたる講座内容を報告するとともに、講座の振り返りの一環として行った質問紙の自由記述欄を用いて、理学療法学科学生が講師となったサービス・ラーニングが受講者に与えた影響を探索的に調査した。

ウォーキング講座の概要

ウォーキング講座は、講義、検査測定、測定結果に基づく個別アドバイスにて構成され、3年生の臨床実習期間を避けて、例年、11月初旬に開催している。講座内にて4年生が、講義の講師、検査測定の実施、測定結果の個別アドバイスを担い、3年生は講義および検査測定の補助などを担当している。講座開催の準備として4年生の講義担当者は、教員が事前に作成した講義資料を参考に、各自で独自の講義資料を作成し、他の学生の聴講の下で講義のシミュレーションを実施している。同時に4年生は測定機器操作の復習を行い、

3年生は測定機器の操作方法について教員から指導を受けて講座開催に臨んでいる。測定結果は、教員が分析した後に担当受講者(2~3名)の結果について学生へのフィードバックを行う。この時、守秘義務の順守等について再確認し、分析結果に基づく個別アドバイスの内容は、教員と担当学生が相談した上で決定している。平成28~30年度におけるウォーキング講座の開催実績は表1の通りである。例年、年度末に浜松市主催の講座報告会が一般市民向けに開催され、平成28年度および平成29年度の報告会では、ウォーキング講座の活動内容を3年生が報告している。

対象と方法

対象者

対象者は、平成28~30年度のウォーキング講座に参加した35名中、質問紙の記入を行った33名である。男性は9名、女性は24名、年齢は平均65.8±10.2歳、全員が初めての受講であった。また、下肢・体幹の機能障害に対する治療経験を有する者が5名認められた。

質問紙調査

講座参加者に対しては、講座開始時に自由記述を中心とした質問紙調査への協力を依頼した。質問項目は講義の難易度、講座の有用性、再受講の可能性について5段階リッカート方式にて回答を求めた。同時に、難易度、有用性のそれぞれについて、感想や学生とのやり取りで印象に残ったことなどについて自由記述欄への記入を求めた。質問紙への解答時間は、講座最終回の個別アドバイス中の空き時間ならびに講座終了時に10分以上の記入時間を確保した。

分析方法

講義の難易度、講座の有用性、再受講の可能性については、個々の質問項目の構成比率

表 1. 平成 28～30 年度におけるウォーキング講座の開催実績

開催年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
講師	理学療法学科4年生4名、3年生4名	理学療法学科4年生4名、3年生4名	理学療法学科4年生4名、3年生2名
対象者	地域在住の一般成人で、ウォーキングを始めたいけれど「自信がない」と思っている方、または「どんな歩き方をしたら良いのか」と悩んでいる方		
場所	浜松市北区A協働センター	浜松市中区B協働センター	浜松市中区C協働センター
日時	・平成28年11月に1週間の間隔を空けて3回実施 ・17:00 ~ 19:00	・平成29年11月に1週間の間隔を空けて3回実施 ・17:00 ~ 19:00	・平成30年11月に1週間の間隔を空けて2回実施 ・18:00 ~ 20:00
受講者	・8名 ・男性1名、女性7名 ・年齢50～70歳代	・12名 ・男性5名、女性7名 ・年齢50～70歳代	・15名（1名が2回目を欠席） ・男性3名、女性12名 ・年齢20～70歳代
内容	①立位・歩行に関する医学的基礎知識を全体講義（第1回） ②歩行時体幹動揺、立位重心動揺測定、足趾把持力などの測定（第2回） ③測定結果に基づく歩き方のコツやトレーニング方法の個別アドバイス（第3回）	①立位・歩行に関する医学的基礎知識を全体講義（第1回） ②歩行時体幹動揺、立位重心動揺測定、足趾把持力などの測定（第2回） ③測定結果に基づく歩き方のコツやトレーニング方法の個別アドバイス（第3回）	①歩行と姿勢に関する医学的基礎知識を全体講義（第1回） ②歩行時体幹動揺、2ステップテスト、足趾把持力などの測定（第1回） ③測定結果に基づく歩き方のコツやトレーニング方法の個別アドバイス（第2回）

を単純集計した。自由記述欄の分析には質的データ分析手法である Steps for Coding and Theorization（以下、SCAT）を用いた⁷⁾。SCATの強みは、小規模データであってもストーリーラインの構築が可能な点にあり、質問紙の自由記述欄の検討という本研究の分析手法としては最適と判断した⁸⁾。

記載された自由記述は、福土と名郷の調査⁹⁾を参考として意味のまとまりごとに1つのテキストデータとした。テキストデータは受講年度別にSCATフォーム上に配置し（表1）、個々のテキストデータを分節化する過程で①データ中の着目すべき語句の抽出、②着目すべき語句の意味を表す別の語句への言い換え、③言い換えた語句を説明するためのインタビューデータ外の語句の記述、④構成概念の考案、⑤追求すべき疑問点や課題の検討、という手順にてコード化を進めていった。得られた構成概念は、各年度において受講者がウォーキング講座から受けた影響に関するストーリーラインを構築するための素材となり、ストーリーラインを断片化することで、データから明示可能となった理論記述を抽出した。最後に、年度ごとに抽出された理論記述をマトリクス上で統合し（表2）、サービス・ラーニングが受講者に与えた影響のス

トーリーラインを再構築した。

以上のプロセスでは、質的研究経験のある筆頭著者がSCATフォームとマトリクスを作成した。この際、分析プロセスの確実性¹⁰⁾を確保するため、構成概念、ストーリーラインおよび理論記述の生成過程を、大学生による講座を2年間開催している質的研究経験を持った第2共同研究者が確認した。さらに、マトリクス上の理論記述を検討するプロセスは、教育系専門理学療法士の認定を受けている6年以上の理学療法専任教員経験を持った第3共同研究者が確認した。

倫理的配慮

講座開始時に、講座内での測定結果ならびに質問紙記入内容を研究活動にて使用したい旨を説明し、使用する場合の研究の趣旨、個人情報保護、研究協力撤回の自由などについて説明を行った。同意書への署名をもって、説明内容を理解し、研究協力への意思を示したものと判断した。

結果

質問紙の単純集計において、講義の難易度は平成28年度にて受講者の75.0%が難しいと回答していた。しかし、平成30年度では

15.4%へと減少していた(図1)。講座の有用性は、平成28、29年度は100%が有用と回答していたものの、平成30年度では84.6%へと低下していた(図2)。再受講の可能性については、77.8~66.7%の間を推移していた(図3)。

自由記述欄の回答者は、質問紙回答者33名中21名であった。このうち、難易度は23.8%が「難しい」、61.9%が「ちょうど良い」、14.3%が「易しい」と判断しており、95.2%が講座を有用と回答し、85.7%が「再受講しても良い」と考えていた。

自由記述欄の分析では、平成28年度は記入者5名から7つのテキストデータが得られ、8種10個の構成概念が抽出された。平成29年度は記入者6名から9つのテキストデータが得られ、10種12個の構成概念を抽出し、平成30年度は記入者10名から21のテキストデータが得られ、21種32個の構成概念を抽出した。これら構成概念を用いて生成された各年度のストーリーラインから得られた理

論記述は、平成28年度が6個、平成29年度が8個、平成30年度が9個であった(表3)。各年度の理論記述をマトリクス上に配置して対比し、類似項目ごとに統合した理論記述から再構築したストーリーラインは以下の通りである。

サービス・ラーニングから受ける影響として、受講者は個別アドバイスや学生との交流に満足感を得て、知識の大切さへの理解を深め、指導内容を「自分でもやってみる」という気持ちを抱くようになっていた。さらに受講者の中には、「もっと知りたい」との希望や、「自分自身の身体の見つめ直しができた」との感想を抱く者も認められた。一方で、2年目までにみられた講義内容の難しさや受講者の個性への配慮、さらに講座運営への不満の表出はなくなり、講義内容に関する高評価を示すようになっていた。同時に、受講者は学生講師の不慣れさを指摘しつつも、この点については理解を示して改善へのアドバイスを提示していた。

表2. SCAT フォームの作成例 (平成28年度受講者の場合)

No	記載者	テキストデータ	<1>テキスト中の 着目すべき語句	<2>テキスト中の 語句の言い換え	<3>左を説明するような テキスト外の語句	<4>構成概念 (数字:構成概念の 累積種数)	概念 実数 <5>疑問点・課題
1	A	個別で計測し、アドバイスをもらえたので良かった。参考になった。	個別で計測してアドバイスもらえた	自分の計測データについてアドバイスもらえたので受講して良かった	データに基づく個別の説明を受けて満足	個別説明への満足(1)	1 個別説明が好評であった。
2	B	勉強になった。足趾把持力が弱いので、改善方法を教えていただき良かった。	足趾把持力が弱いので改善方法を教えていただき良かった	検査結果に基づいて自分に合った改善法を提示してもらって良かった	データに基づく個別の説明を受けて満足	個別説明への満足(1)	1 個々の受講者の検査データに基づいて個別のアドバイスをもらったことが好評と判断した。
3	C	初めて学生さんのお話を聞かせていただきました。いろいろな話は全てになりました。人生長くやりましたが、まだまだ知らないことばかりだと思いました	いろいろな話は全てになりました。まだまだ知らないことばかりだと思いました	学生講師の講義内容がためになった／講座での学習内容は知らないことばかりだった	講義内容は全てがためになったという印象／「自分には知らないことがまだまだたくさんある」ということへの気づき	講義内容への満足(2) (3)	2 知らないことの多さへの気づき
7	E	こうした学ばれたことを今後も「講座」として定着させていただけました。特に眼、目、耳の正常維持に関すること。	学ばれたことを今後も「講座」として定着させていただけました	学習内容を今後も講座として示して欲しい	今後も続けて行って欲しい	講座継続への希望(6)	No.6と合わせて、対象者Eは、講座に満足して先行研究と同様に「講座継続への希望」を表明したと考えられる。
受講者は8名						8種類	10
ストーリーライン (下線部: 構成概念)		「講義内容が難しい」という印象を述べる受講者がいたものの、講義内容への満足を示す受講者もおり、検査結果に関する個別説明への満足を示す受講者が複数認められた。学生との交流について受講者は、学生講師への好感や感謝を示していた。受講を通じて、知らないことの多さへの気づきを得られた述べるとともに、アドバイスを受けた運動を「自分でもやってみる」という宣言や、このような取り組みを続けて欲しいといった講座継続への希望を示していた。					
理論記述		<ol style="list-style-type: none"> 1 「講義内容が難しい」という印象を述べる者がいる。 2 講義内容や検査結果に関する個別説明への満足を示している。 3 学生との交流について、学生講師への好感や感謝を示している。 4 知らないことの多さへの気づきを得られたと述べている。 5 アドバイスを受けた運動を「自分でもやってみる」と宣言している。 6 このような取り組みを続けて欲しいといった講座継続への希望を示している。 					
さらに追求すべき点・課題		<ul style="list-style-type: none"> ・初年度であったため、講義内容は学部生が学ぶ正常歩行に関する運動学的知識レベルとなっていた。2年目以降は、できるだけ平易な言葉で説明することに努めている。講座内容についての理解度が上がれば、満足度も上がるのだろうか？ ・受講者が求めているのは、測定結果の個別説明とその対策としてのアドバイスと思われる。 ・学生講師への印象は、非常に良い。好印象の背景は、世代間の相互作用によるものか(受講者にとって、学生は孫世代に近い)、それとも学生個々の能力によるものかは、検討を続けていく必要がある。 					

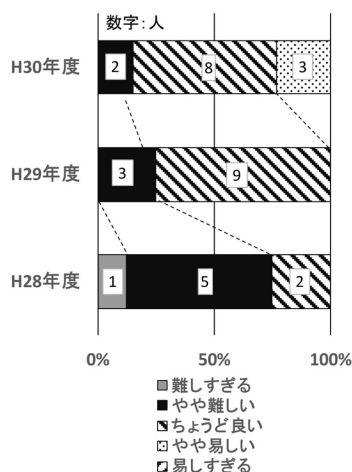


図1. 講義の難易度

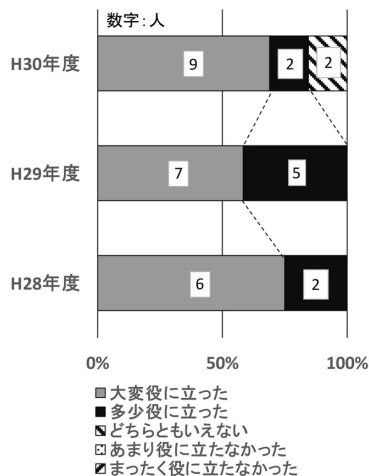


図2. 講座の有用性

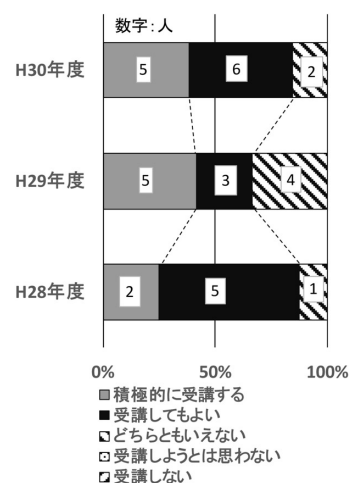


図3. 再受講の可能性

考察

本研究は、理学療法学科学生が講師となったサービス・ラーニングの概要を報告するとともに、質問紙の自由記述欄から得られたテキストデータをもとに、サービス・ラーニングが受講者に与えた影響の探索を試みた。その結果、サービス・ラーニングとして開催されたウォーキング講座の受講者は、個別アドバイスや学生との交流から満足感を得ており、歩行に関する知識を深めて、アドバイスの内容を実践してみようというやる気を活性化させていた。さらに、本講座は受講者にとって自分自身の身体を客観的に見つめ直す機会となり、もっと知りたいという知的好奇心が刺激されていた。平成28、29年度の受講者は、講座運営の不慣れさや内容の難しさに不満を抱いていた。しかし、平成30年度の受講者においては、指導的見地から不慣れさを容認して改善へのアドバイスを提示していた。

サービス・ラーニングの構成因子には、授業の内容、学生の主体性と興味関心、そしてコミュニティのニーズが挙げられている¹¹⁾。本ウォーキング講座は、歩行への自信の無さや不安を抱えた地域住民を対象に開講しており、そのニーズは受講者自身の歩行の確認と歩き方のコツの理解と考えられた。講義の内

容は、歩行に関する解剖学や運動学の知識を紹介することが中心となっていたため、「難しい」との印象を与えていた。しかし、個別アドバイスでは気軽に担当学生へ質問ができるため、講座開催当初より受講者のニーズは満たされ、満足感の表出に結びついていたものと考えられる。受講を通じて歩行に関する知識の理解が深まると、指導内容を「自分でもやってみる」と表明する受講者や「もっと知りたい」と希望する受講者が現れ、やる気の活性化が認められた。このような変化は、講師となった学生との交流により受講者がエンパワメントされた結果、生じたものと推定される。安梅¹²⁾は、エンパワメントを「元気にすること、力を引き出すこと、共感に基づいたネットワークをつくること」と定義し、支援の受け入れを拒む段階から受動的に支援を受ける段階、自ら支援に参加する段階、そして支援への積極的な参加が本人の自己実現につながる段階へと進化して行くことを示唆している。本講座の受講者は、受講を希望した段階で自ら支援に参加する意思表示をしている。そして、知識の習得や学生との交流を通じて、歩行をより積極的に生活の中に位置づけようと試みている様子が感じ取れる。支援対象者のエンパワメントを促す原則には、

表3. 理論記述のマトリクス

No.	統合した理論記述	各年度における理論記述		
		平成30年度	平成29年度	平成28年度
1	講座内容、特に個別アドバイスに満足感を示している	講座内容について、個別説明や検査を体験できたことへの満足感を表明しており、良い評判の拡散にも努めている。	講座内容について受講者は、解りやすさへの満足や検査結果に関する個別説明への満足を示している。	講義内容や検査結果に関する個別説明への満足を示している。
2	学生との交流に満足している	講師の学生との交流では、個別対応を通じて楽しいひと時を過ごせたとの意見や将来への期待を表明している。	学生との交流を通じて、学生講師の気易さへの満足感を示している。	学生との交流について、学生講師への好感や感謝を示している。
3	知識の大切さについて理解を深めている	講座内容について、コツの理解や知識の取得ができた等の生活への役立ち情報であったとの感想を抱いている。	受講を通じて、理論を知ることの大切さの理解を深めたことを示している。	知らないことの多さへの気づきが得られたと述べている。
4	指導内容を「自分でもやってみる」と宣言している	やりたいことの発見があったことや「自分でもやってみる」という宣言が表出されている。	アドバイスを受けた運動を「自分でもやってみる」と宣言している。	アドバイスを受けた運動を「自分でもやってみる」と宣言している。
5	「もっと知りたい」と希望している	さらに詳細な分析や詳しい情報提示への要望を示す者もいる。		このような取り組みを続けて欲しいといった講座継続への希望を示している。
6	「自分自身の身体の見つめ直しができた」と述べている	講座を通じて自身の身体の見つめ直しができたとの感想や歩き方の特徴を知れたことへの感謝の言葉を述べている。	受講を通じて、自身の身体の見つめ直しができたと述べている。	
7	講義の内容が難しいと感じている		受講者の中には、講座内容について小難しいという印象を抱く者がいる。	「講義内容が難しい」という印象を述べる者がいる。
8	受講者の個別性への配慮を求めている		受講者一人一人の個性への配慮の要望を表出している。	
9	講座運営への不満を抱えている		データの入力トラブルにより、説明内容のばらつきや比較対象のないデータへの不満が認められる。	
10	講義内容へ高評価を示している	講義内容を理解し、目新しくして有意義や興味深いとの印象を受けている。		
11	学生講師の不慣れさへの理解を示している	学生講師のプレゼンテーションの分かりにくさについて、不慣れという理由から学生への気遣いを示している。		
12	学生講師の不慣れさを指摘し、改善へのアドバイスをしている	学生講師のプレゼンテーションの分かりにくさについて、多くの批判的アドバイスと改善に向けた要望も提示している。		

目標を当事者が選択すること、主導権と決定権を当事者が持つこと、当事者が自己の失敗や成功を分析して学びに結び付けること、そして問題解決の過程に当事者の参加を促して個人の責任を高めることなどが挙げられている¹³⁾。今回の講座は大学生が講師を務め、歩行に関する指標の測定結果を学生たちがフィードバックしている。このため歩行に関わる専門家の話を聴くことや、健康診断の結果を受け取るような場面と比較して、受講者はより主体的に測定結果と向き合い、積極的に学生たちから有効な対策を引き出そうと努めたの

ではないかと考えられる。津上ら¹⁴⁾の行った地域活性化事業に対する調査でも、大学生を地域に受け入れることが地域住民のエンパワメントに結びついたと報告されており、本研究におけるサービス・ラーニングの影響と類似していた。

また、受講者が表出した不満は一方的に不服を述べるというのではなく、「不慣れだから」と学生への気遣いも示されていた。さらに、不備な点に関して改善に向けたアドバイスも提示されており、講座運営やプレゼンテーションについては、学生たちの成長を受

講者が促しているように感じた。山西¹⁵⁾はサービス・ラーニングの特性を、ボランティア活動との比較から、提供する学生側とそれを受ける側とが対等の互酬関係に立ち、その活動を通じてサービスを提供する側も学びを得るという双方向的要素を挙げている。本研究でも、サービス・ラーニングがサービスを提供する側と受ける側の双方向的要素を持っていることが示されており、山西の主張を支持する結果となった。さらに教育的側面からは、講座の受講者が指導する立場としての自覚を持つようになり、受講者という役割を越えて学生と対峙していることが確認できた。

本研究は、質問紙の自由記述欄の記入内容をテキストデータとして使用したため、インタビューにて聴取したデータと比較して、意味内容の深い理解を得ることは難しかった。同時に、データに関する当事者チェックも行うことができなかった。しかし、本研究の主要研究者は全ての講座に参加しており、その状況を参与観察できていたため、テキストデータの描き出している背景を理解することは十分に可能であったと考えている。さらに、サービス・ラーニングの教育対象は学生であり、学生への成果を検証することが必要である。今回の調査では受講者側に学生から受けている影響を確認することができたため、今後は学生側の受けた影響も確認し、受講者と学生との相互作用を明らかにすることが必要と考える。

謝 辞

本研究にご協力をいただきました講座受講者の皆様、ならびに準備・運営にご協力をいただきました浜松市役所および協働センターの職員の皆様、そして講座開講に尽力いただいたゼミ生の皆様に心から感謝を申し上げます。

文 献

- 1) 浜松市：浜松市生涯学習推進大綱。
<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/shogaigk/lifelong/shogaigk/index.html>.(2013.9.1)2018.8.26 閲覧
- 2) 広報はままつ 2018年3月号：地域に新たな風を—大学生による講座
https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/koho2/pr/kouhou_all/1803/tokusyutokusyu.html.(2018.3.5)2018.8.26 閲覧
- 3) 倉本哲男：サービス・ラーニング (Service-Learning) の授業構成因子に関する研究—「リフレクション」(Reflection) との関係性に着目して—。教育方法学研究 30:59-70, 2004.
- 4) 木村充, 河井亨：サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究。日本教育工学会論文誌 36:227-238,2012.
- 5) 松谷美和子, 田代順子, 他：看護教育法としての「サービス・ラーニング」実践研究文献レビュー。聖路加看護大学紀要 30:31-38,2004.
- 6) 魚崎須美：サービス・ラーニングに注目した公衆衛生看護学実習の試み。兵庫医療大学紀要 5:17-21,2017.
- 7) 大谷尚：4ステップコーディングによる質的分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 54:27-44,2007.
- 8) 大谷尚：SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—。感性工学 10:155-160,2011.
- 9) 福土元春, 名郷直樹：指導医は医師臨床研修制度と帰属意識の無い研修医を受け入れられていない—指導医講習会における指導医のニーズ調査から—。医学教育 42:65-73, 2011.
- 10) Flick U:Qualitative Forschung. Rowohlt

Taschenbuch Verlag GmbH, Hamburg,
1995.小田博志, 山本則子, 他訳: 質的研究入門—人間科学のための方法論—. 東京,
春秋社, 275-293,2003.

- 11) 倉本哲男: サービス・ラーニング
(Service-Learning) 授業構成因子に関する
研究—「リフレクション」(Reflection)
との関係性に着目して—. 教育方法学研究
30:59-70,2004.
- 12) 安梅勅江偏著: 健康長寿エンパワメント—
介護予防とヘルスプロモーション技法への
活用—. 東京, 医歯薬出版, 2007, pp.3-6.
- 13) 安梅勅江著: エンパワメントのケア科学—
当事者主体チームワークの技法—. 東京,
医歯薬出版, 4-6,2004.
- 14) 津上正敏, 日紫喜あゆみ: 地域活性化にお
ける学生参加の意義と可能性—地域と大学
の連携課題. 桜井正成, 津止正敏 編: ボ
ランティア教育の新地平—サービス・ラー
ニングの原理と実践—. 京都, ミネルヴァ
書房, 134-155,2009.
- 15) 山西裕美: 大学におけるボランティア活動
体験プログラムの実践について. 九州保健
福祉大学研究紀要 7:93-102,2006.